寄稿論文

革命の実践と表象の視点
――中国社会の諸民族をクロスオーバー的に考察するもう一つの可能性――

韓 敏
＜国立民族学博物館＞

愛知大学国際中国学研究センター（21 世紀 COE プログラム研究拠点）が主催した今回のシンポジウムの趣旨は、これまでに地域別、民族別に蓄積されてきた精緻な中国社会の研究を、総合的な視野に立って位置づけしなおし、今後の漢族と少数民族社会に関する研究への新たな刺激と視点を提供することを目的としている。シンポジウムでは、多くの研究学者が人類学の視点から少数民族の漢化、民族間関係、地域、漢族社会内部の都市と農村の二元構造、台湾における漢人の意味の変化などの視点から中国社会の複合性を考察し、市場経済のグローバル時代における中国研究の方法論の探求に重要な問題提起をした。

現代の中国社会をクロスオーバー的に考察する可能性と方法論はいろいろと工夫する余地があり、革命の実践と表象という研究視点はその可能性の一つといえよう。

1949 年中華人民共和国誕生以降、社会主義国家政権は、新しい国家政権建設（state-making）のために、漢族や他の民族たちの社会構造と法制度を打ち壊して、政権の官僚化を徹底させ、社会への政権の浸透を強化した。階級身分制度、戸籍制度の確立、民族識別、集団化の装置としての人民公社の設立などはその一環としてみることができよう。国家政権建設と同時に、新しい国民国家の建設（nation-building）にも向けて、社会主義中国に対する各民族や各階層のアイデンティティ、参与、義務と忠誠を促進した。「大慶」、「大寨」、「雷鋒」、「現代革命京劇」などの社会主義革命の理念を具現化する各分野の新しいモデルの創出とその普及のキャンペーン、社会主義教育運動、文化大革命などのさまざまな政治運動、毛沢東語録の学習などは、国民国家の建設（nation-building）のための手段としてとらえることができる。

2006 年は、1966 年に始まり 1976 年に終焉した文化大革命の 40 周年、新中国の主要な創設者毛沢東の没後 30 周年にあたる節目の年である。筆者が２年前の 2004 年 10 月に国立民族学博物館で「中国の社会変化と再構築――革命の実践と表象」という題目の共同研究会を立ち上げた。24 名の中国研究者によって構成されたこの共同研究会は、２年半のプロジェクトであり、近代中国の革命について二つの問いを行なうことによって、中国百年の近代史における革命の意味とその実践を、人類学、民俗学、歴史学、社会学、文学などの学際的研究によって明らかにするものである。第一の問いは、社会主義革命が生み出した言説や諸制度と、それ以前の伝統との断絶性と連続性を究明することである。もう一つの問いは、社会主義イデオロギーにもとづいて新しく作られた言説、諸制度、実践と表象がいかに生成され、市場原理のグローバルの時代において、いかなる展開を示し、現在の社会に再構築されているのかである（韓　2006：２－３）。

革命的ジェンダー観とその実践

社会的・経済的平等をめざす中国の社会主義革命は、伝統的な男尊女卑の社会構造を改造しようとして、法律の整備、女性の社会進出などの手段を通して男女の経済的・政治的平等の実現を図った。1954 年に制定された新憲法では、「女性は政治・経済・文化・社会・家族のあらゆる分野で男性と同じ権利をもつ」ことが認められた。

建国前の女性は家族や親族といった相互関係の中に位置づけられ、常に男性の母親、姉妹、妻、娘として扱われ、表象されてきた。社会主義革命によって、女性は家族関係から捨象され、政治的存在として表象されるようになった。女性に対する呼び方も生物的存在を意味する「女人」から政治的存在を意味する「婦女」へと変えられた。当時の指導者毛沢東は「中国女性は労働力の大貯蔵庫だ。この可能性を偉大な社会主義国家を建設するたたかいに役立てねばならない」と述べている。新しい国家的イデオロギーにのっとった「婦女」は、男性と同じように社会進出する社会主義国家建設のための貴重な労働力であり、家庭の束縛から救い出されるべき存在であった。革命的ジェンダー観を具現化しているのは、「鉄姑娘」と呼ばれる女性像である。

共同研究班の班員である牧陽一氏がこの「鉄姑娘」とよばれる画一化した革命の女性像は男性を規範にする社会主義リアリズムによるものであると指摘した（牧　2006）。革命的ジェンダー観がさまざまなルートを通して民衆の間で広められ、彼女たちの人生観と行動様式に影響を与えた。アメリカの人類学者ロフェル（Rofel）は建国後の杭州市の国営紡績工場で働いている三世代の女性労働者のライフスタイルとジェンダー・アイデンティティを比較し、仕事、婚姻、社会と文化に対する世代間の態度の違いと変化を取り上げ、中国の近代性、中国的ジェンダーの近代性を分析した。第 1 世代の労働者とは 1949 年前後に工場に入った祖母の世代であり、彼女達にとっては社会主義の労働力であることはアイデンティティの重要な部分を成している。それに対して、文化大革命の 1970 年代に入社した母親の第 2 世代の労働者たちは、従来の権威やヒエラルキーに反対し、女性の精神と身体に関する従来の規制を打ち破ることによって中国的ジェンダーの近代性を達成しようとする一方、自分たちの仕事、配偶者、子供も人生の一部としてみている。第 3 世代の労働者とは、ポスト社会主義の時代に入社した娘の世代のことであり、彼女たちは身体の装飾、異性間のロマンス、結婚と母になることなどを通して、個人的な達成感を求めようとする人たちである（Rofel：1999）。

革命後の女性地位の変化は、女児の命名方法にも表れている。建国以前の漢族社会では、一般的に男児には山、河、樹木、勇猛な動物のような陽性的な名前、あるいは仁、義、礼、智、振国などのような、主流社会の価値観やイデオロギーに相応しいような名前をつけていた。それに対して、女児には月、花、草、玉などのような陰性的な名前、あるいは貞、淑、静などのような女性の行動規範に相応しい名前が付けられていた（韓　1997：18－19）。しかし、建国後の社会主義革命によって、女性の命名法には大きな変化が観察された。筆者が主催した民博の共同研究会において、王愛静氏が青島郊外の農村地域における女性の命名方法には次の二つの変化があったことを報告した。女性の命名実践に関する一つ目の変化は、女性も「大名[1]」という正式の名前を持つようになり、しかもその正式の名前の中にはこれまで男性のみに使われてきた「輩字[2]」も使用されているという点である。もう一つの変化は女性の名前に使う文字が多種多様になった点である。これらの変化は女性の地位の向上につれ、社会・家庭の中での彼女たちの重要性が高まったことと大いに関連していると考えられる（王　2005）。

女性の命名方法だけではなく、女性の名前の使用にも大きな変化がみられている。陝西省の驥村では、建国以前、女性の名前は家庭に附属したものであり、結婚する場合、実家の姓（劉）の前に夫の姓（張）をつけて、「張劉氏」と呼ばれ、それまでに実家で使われていた女性の名前は結婚後ほとんど使われなくなる（郭 2003：90）。これを無名化（nameless）の過程という（Watson 1986）。ところが、社会主義集団化の時代において、女性が集団生産に参加することによって彼女達の個人名が頻繁に使用されていたが、改革開放後、家庭が再び生産単位になってから、女性の無名化（家庭化）現象が再度に起こったと報告した（郭　2003：90）。

今後、さまざまな地域、民族、年齢層、階層に見られる革命的ジェンダー観とその実践に関する比較研究は、いうまでもなく中国社会の革命と近代性をクロスオーバー的に考察する際に有効な手がかりとなろう。

社会主義革命理念を具現化する英雄像の生成と従来の文化との関連性

革命による国民国家の建設という課題へのもう一つの重要な切口の一つは、新政権が社会動員の手段としていかなる新しい英雄像を生成し、いかにしてその英雄像を社会へ浸透させていったかに関する分析である。

共産党政権は建国以前から時代のニーズに応じてさまざまな英雄像を作り上げてきた。これまでに革命精神と国家的道徳のシンボルとされた数々の英雄の中でもっとも名前が知られ、もっとも長く宣伝されているのは雷鋒である。共同研究班の班員である武田雅哉氏はアニメ、ポスター、子供向きの絵本などの図像を通して、1960 年代から現在までの政府、美術家、絵本家による雷鋒表象の変化を分析して、中国文化論の視点から革命の英雄美談と伝統的な英雄物語の間に見られる話法の連続性を論じている（武田　2003、2006）。同じ共同研究班の班員である聶莉莉は「人民に奉仕する」という新しい言説に焦点をあて、このディスコースが具現化された二人の人物、焦裕禄と雷鋒を取り上げ、革命の英雄模範の生成過程と各レベルの組織で実施された模範人物の選出制度を通して、革命的ディスコースがいかに人びとに内在化されているのかを考察した（聶　2006）。また、アメリカの人類学者チャオー（Chao）による雲南省麗江ナシ族自治州の東風とナシ族の村に現れたペー族出身の女性シャーマンに関する事例研究も興味深い。かつて紅衛兵だったこのシャーマンは、鶴慶ペー族の頭飾りをし、紅衛兵の腕章を付け、肩には軍用バッグをかけて、軍用のゴム靴を履いた。彼女の治療儀礼には従来のナシ族が信奉してきた神々ではなく、毛沢東、周恩来、鄧小平を登場させ、さらに「雷鋒同志に学ぼう」などの政治的スローガンを頻繁に口にした。この女性シャーマンの治療は、少数民族の伝統的儀式に国家権力および国家的イデオロギーが介入されていることを意味している（Chao 1999）。

民間社会における国家権力と国家的イデオロギーの介入と両者の融合

上記の雲南少数民族の治療儀礼の事例で見られた伝統的民間儀礼と国家的イデオロギーと国家権力の融合は他の地域やほかの民族の間にも見られる。1980 年代後半から回復されてきた伝統的民族儀礼や民俗文化に国家的象徴が存在していることは共通して見られる特徴である。

たとえば、中国西北部黄土高原における伝統的廟会（廟の祭り）およびその祭りを運営する会が近年回復され、その動きの中で 1990 年代初期にこの地域には三つの毛沢東・周恩来・朱徳を祭る施設である「毛沢東廟」ができた（深尾　1998）。「毛沢東廟」のことは、地元では「三老廟」とも呼ばれている。革命リーダーを祭る「三老廟」は先祖の記憶・神への祈願・革命伝

統の教育といった従来の廟宇と記念館の機能を合わせ持った新しいタイプの廟であり、廟の中に祭られている毛沢東・周恩来・朱徳は建国元老という人間的側面と救済の神としての側面を持っている。「三老廟」の出現は、陝北の革命根拠地の歴史記憶、中国宗教の基盤を成しているアニミズムと儒教的「慎終追遠」(死者を厚く弔い、先祖を忘れない)の倫理観・宗教観、民間信仰における国家的権力の介入とイデオロギーの浸透によるものである(韓　2005)。また、河北省定県範荘鎮で毎年の旧暦2月2日に行なわれている「龍牌会」という古来の祭りに、1998年から諸神の画像の中に毛沢東肖像が新たに加わった（高　2000：321）という事実も民俗文化と国家的象徴の融合を物語っている。

人類学者、民俗学者の周は、偶像崇拝、言語呪術、二項対立などの事例を挙げて、文化大革命時期のさまざまな実践を民俗現象として捉え、「この運動（文化大革命）は、どこから見ても“中国的”であり、“民俗的”でもある。文革を民俗学の観点から眺めてみることは、文革も土壌を構成した中国の民間社会およびに反映されている中国の国民性を理解する上で有効なのではないだろうか？（周 1999：208)」

1949年建国以来から現在に至るまで、国家政権の建設と国民国家の建設の諸段階を経て、旧来の風俗慣習、道徳倫理、宗教信仰には大きな変化が起こり、社会主義国家の理念と概念はイデオロギー化され、日常的実践を通して漢族とその他の民族の間に根を下ろし、近代史の中でもう一つの伝統を作り上げている。社会主義市場経済への移行とグローバル化の今日において、社会主義革命の歴史と実践は完全に風化したのではなく、人々の行動様式、記憶、口頭伝承および政府による新しい時代の英雄像の再生産の中で再構築され、観光、芸術、民間信仰などの分野で表象され、流通されている。革命の実践と表象の視点は、多民族国家の中国社会の変化と連続性をクロスオーバー的に考察するには重要な手がかりとなろう。

参考文献

中国語

高丙中

2000「民間的儀式与国家的在場」郭于華編『儀式与社会変化』北京：社会科学文化出版社

郭于華

2003「心霊的集団化――陝北村農業合作化的女性記憶」　北京：『中国社会科学』第4期 pp79－92

英文

Chao Emily

1999 The Maoist Shaman and the Madman: Ritual Bricolage, Failed Ritual, and Failed Ritual Theory. *Cultural Anthropology* 14 (4):505-534.

Rofel Lisa

1999　*Other Modernities: Gendered Yearnings in China after Socialism*. Berkeley & Los Angeles: University of California Press

Watson　R.

1986 The Named and Namelss: Gender and Person in Chinese Society. In *American Ethnologist* 13(4), November

日本語

王愛静

2005「中国青島における社会・文化的変容と名づけの実践」民博共同研究会『中国の社会変化と再構築――革命の実践と表象を中心に』大阪：国立民族学博物館

韓敏

1997「漢族の女性――天の半分を支える」『女の民族誌１アジア篇』綾部恒雄編集　pp.13-38　東京：弘文堂

2006「特集　革命の実践と表象」『民博通信』114：１－17　大阪：国立民族学博物館

周星

1999「“文革”期の民俗文化現象」『中国２１』Vol. 6 愛知大学現代中国学部編 pp207－219　名古屋：風媒社

聶莉莉

2006「人民に奉仕する英雄――全体主義下の個人と人民」『民博通信』114：6－7　大阪：国立民族学博物館

武田雅哉

2003『よいこの文化大革命――紅小兵の世界』東京：廣済堂出版

2006「『雷鋒おじさんに学ぼう』の図像学――20 世紀における、ひとつの怪物誌」『民博通信』114：8－9　大阪：国立民族学博物館

深尾葉子

1998「中国西北部黄土高原における廟会をめぐる社会交換と自律的凝集」『国立民族学博物館研究報告』23 巻 2 号 321－357　大阪：国立民族学博物館

牧陽一

2006「プロパガンダの男と女――現代中国のアートへ」『民博通信』114：10－11 大阪：国立民族学博物館

[1] 大名とは、人の正式の名前、幼名に対し、学齢に達したときにつけられる名前のことである。
[2] 輩字とは、父系血縁集団内の世代序列を表わす命名法である。輩行、排行字、班排字とも称される。輩字の多くは儒教理念などに即した詩の形で族譜に記載され、そこから一文字ずつ各世代の名前に組み入れられる。輩字の使用は通常父系血縁集団内部の男性のみに限定される。